



発行：小網代ヨットクラブ  
〒238-0225  
神奈川県三浦市三崎町小網代 1385-18  
編集：広報委員会  
編集長：里吉美恵子

# 小網代通信

2020年 7月号 VOL-265

## 今月の内容

・連絡事項	編集委員	1ページ
・「パラオ脱出記」	児玉 萬平 (テティス4)	2~3ページ

### 連絡事項 (編集委員)

#### 1. < イベント 7月KFR 中止 >

一向に収まらない新型コロナウイルス感染症、予測通り第2波と思われる感染率となってきていますが、行政の反応は経済活動との兼ね合いで新生活様式の励行を促すだけとなっています。

#### 【野村副会長及びレース副委員長から】

KYC では、他県から来るメンバーも多く、レースとなると 50 人以上の方々がクラブハウスや、その周辺にも車もと密になってしまい、レースに参加されるメンバーの感染の危険性はもちろんの事、小網代にお住いの皆様を不安にさせてしまうなどの課題があります。ヨットライフおよび KFR 再開のために、KYC メンバーと地元住民にご安心いただけるための取り組みなどを総務委員会でも引き続き検討しております。皆様におかれましては、当たり前となった 3 密の防止をはじめとした感染予防策の徹底や、クラブハウス内での感染予防策などを今一度徹底していただき、この難局を皆様と一緒に乗り越えたいと考えております。



#### 2. < 台風シーズンがやってきます。対策お忘れなく！ >

この夏、本来なら東京オリンピック大会が行われ、多くのレガッタが開催され、クルージングに出かける時期ですが、新型コロナウイルス感染症のおかげで控えめな夏になりそうです。とは言え、これからの季節は台風などの影響が心配になってきます。昨年の台風のコースは、相模湾周辺に被害をもたらしました。やはり備えは大切ですので最低限のことはしておきたいですね。

#### 3. < “KAZI”誌 最新号に KYC 創立 60 周年記念パーティの写真が掲載されました >

2016 年 3 月、東京霞が関にて開催しました小網代ヨットクラブのパーティの集合写真が“KAZI”誌 8 月号 101 ページに掲載されています。油壺ボートサービス (ABS) 日高芳子社長によるヨット界における「紺のブレザー」についてのお話で、文中写真として是非小網代ヨットクラブのあの時の写真を掲載させて欲しいとのお申し出に快諾したものです。懐かしいですね。

 【小網代ヨットクラブウェブサイト情報】 URL <http://koaziroyc.jp>

【次回 総務委員会 7月18日(日)18:00 web会議 ご要望等は、[office@koaziroyc.jp](mailto:office@koaziroyc.jp) にご連絡ください】

## パラオ脱出記

テティス4 児玉萬平 記

本年1月15日“パラオレース”表彰式が終わって各レース艇の艇長と話し合った。「これから何処に行く？何時出航する？」

「ラッキーレディ」と「鷗翔(かもめとぶ)」はさらに南下し、ヘレン環礁を経てインドネシアへ向かうため、数日後にはパラオを出航するという。「トレッキー」と「アルタイル」は沖縄-東海レース参加のため沖縄・宜野湾に向かう予定だが回航要員の手配があって3月半ばに出航予定だという。

「テティス4」はレースメンバー全員が一旦帰国、回航組は改めてパラオに向かうことにし、4月のチャイナシーレースに向け、曲げてしまったブームの交換、サンゴ礁にヒットさせたキールの修理、セールのリペアを香港で行うために2月末には出航したいと思っていた。

1月16日、成田に優勝盾と、(ほぼ全てが壊れた)航海計器を持って降り立ったその時、まさにコロナ騒ぎの幕が上がっていた。刻々と入国禁止国の情報が入ってきた、パラオのお隣のマリアナ、グアムは早々とクローズ、経由地としていたフィリピンのセブでも死者が出ていた。パラオに行くには日本からの直行便は無く、グアム経由を除くと仁川か上海を経由する、何れもその時コロナ発生が顕著になっていた場所だった。パラオは不法滞在を防ぐためか帰国の航空券を持っていないと入国させないルールがあり、我々のように航空機で行ってヨットで出国する場合には、大統領が署名する特例扱いの書類を持参する必要がある。ところがこれがコロナの影響なのかなかなか発行してもらえない。入国禁止国の数が増え続け気がせくなか、無駄になっても帰りの航空券を購入しようとする段になって、やっと大統領のサインが入った特例書類が届き、ようやく出発日の2月29日を迎えた。

その間、中国本土の感染拡大を受けてロイヤル香港YCから今年のチャイナシーレースの延期がアナウンスされ、それなら我々も沖縄-東海レースに切り替えることにして、回航目的地を沖縄とし、石垣・宮古を経由していくことにした。交換ブームの仕向け地の変更、上架整備計画の変更、回航中に寄港する予定だった海外ヨットクラブへのお断りなど、大慌てで連絡を取りまくった。

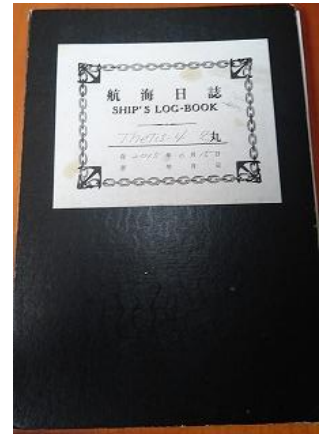
成田空港ビルはガラガラ、我々以外には数人しかいない。乗り換えは仁川、こちらでも全く人がいない。飛行機もガラガラで席を連ねてベッドにする。拍子抜けするくらいだが安心もした。

パラオの空港では乗客全員のおでこに体温センサーを接触させて検温、こちらの方がよほど危険な感じがしたが、空港を出るとマスク姿は誰もいない。至って平穏・早朝のハーバーに着くと夜勤のガードマンはテーブルの上でおカミさんと一緒に就寝中、いっぺんにパラオモードに切り替わった。

それから出航までの間は、全交換した航海計器の取り付け、セールの応急修理、食料・飲料の買い出しとよくある回航準備風景だったが、いつ出国制限がかかるか冷や冷やししながら3月3日を迎えた。お世話になったハーバーやツアー会社のスタッフに見送られて舫を解いたときは妙にホッとしたことを覚えている。聞けばその後一週間ほどしてパラオ発着の航空便は全便運航停止になったという。(間に合った！)

パラオ～石垣回航9日間のうち8日間は、これぞトロピカルセーリング・・・というべき最高のコンディション。風向もリーチングからクォーターリーで、最高でも15kt止まり、パラオレースの最中は20-30kt、常にスプレーを浴びていたことと比べるとまさに天国。

昼の気温は29℃、たまに来るスコールを待って裸になって水浴びをする。それが過ぎれば夕暮れのドリンクタイム。製氷機で作った水でグレンフィディックのオンザロック・・・最高！



夜は船尾に南十字星、船首に北極星が同時に掛かっていて、星を見上げながら・・・この時はワイルドターキー13年でした。

一方、日本への帰国も課題が山積、フィリピン、香港に向かう準備を変更して日本国内への入国書類や手続きを大慌てで進めた。併せてコロナによる入国制限や2週間の足止めの有無も話題に上っていて、その確認に追われた。

そうでなくても海外から日本国内に入るときは・・・

入国管理局:乗員リスト、資格変更届、入出港届、入港通報

税関:乗員リスト、資格変更届、入出港届、乗員携行品申告書、船用品申告書

海上保安庁:乗員リスト、保安情報(1~4)

検疫署:乗員リスト、出入港届、無線検疫申告書、無線検疫送達書、明告書

石垣市港湾課:入出港届、岸壁使用願い

など少なくとも24枚の書類を用意しないといけない。

加えて、艇に備えておくものとしては国籍証明、船検証、操縦士免許、パスポートも必要だ。

上記の書類のほとんどは事前にそれぞれの役所にFAXで送っておくことになるが、一番大変なのは無線検疫送達書だ。これは入港予定時刻36時間前にFAXで送達することになるのだが、本船ならともかく、ヨットで時間きっかりに入港しろというのは土台無理な要求だ。そこで衛星携帯電話で陸上の連絡担当者と随時すり合わせ入港予定時刻のアップデートをしていき、まあまあ行けそうだったときに連絡担当者から予め用意してあったFAX原稿を流してもらう。今回はなぜか、申告した入港予定時刻3月11日午前9時に寸分たがわず到着することができた。

石垣港入港と同時に、保安庁、税関合わせて6人程が乗り込んできた。こちらはコロナでどのような扱いを受けるか相当身構えていたが・・・入国管理官も検疫官も現れない。一方で乗り組んできた保安庁職員の間心の的は麻薬、艇内くまなくチェックが入る。そうか、ここは中国からの覚せい剤密輸の拠点なのだとな納得。石垣港はまた尖閣列島防衛のための大型巡視船の基地になっている。これだけの巡視船が交代で尖閣の海に出かけているのか、と頭が下がる。

何時まで経っても入国管理官も検疫官も来ないので電話をすると、事務所まで来いとのこと、クルー全員で出かけていって入管でパスポートの照合を受ける。検疫署の方は一枚の書類を用意してあって署名しろという。エボラ出血熱の感染は無いという宣誓書だった。

エボラかよ・・・コロナでないんだ、と拍子抜け。

その後のニュースで石垣島には感染症専門のベッドが4床しかない、そのうち県外者が3床を占有し、島民向けには1床しか残っていない、県外者は入島するな！という悲痛な呼びかけが始まったと聞く。あの時はそんな雰囲気では全くなかった。そうでなかったら我々は白い目で見られていたろうと思う。

その後、「テティス4」は宜野湾で上架、キールの修理を行い、

沖縄-東海レースもキャンセルになったため、沖縄の自粛要請が終わった5月の最終週に宜野湾～小網代の最終行程を航し、全ての自粛要請が解除された翌日6月1日に小網代に帰って来た。

今日現在、ともにレースを戦った僚艇のうち「ラッキーレディ」と「鷗翔」はフィリピンのスービックで留守番クルーとともに足止めを食っている。我々のすぐ後に沖縄に回航すると言っていた「トレッキー」と「アルマイル」は、パラオへの航空便が再開されるまでパラオの泊地のブイにつながれたままになっている。「テティス4」ははるうじてシャッターが閉まる前にパラオを脱出、無事小網代に帰還を果たしたのだ。



北緯10度の夕暮れ

